

ファンタジーと現実のあいだの不鮮明な境界
——マーラーの交響曲第七番スケルツォにおける「無気味さ」の研究——

高坂葉月（東京芸術大学／インスブルック大学）

グスタフ・マーラーの交響曲第七番第三楽章冒頭には、「スケルツォ—影のように Scherzo-schattenhaft）」と記されている。「影のように」という珍しい指示は研究者たちの気をひくものの、多くの場合は言及されるだけにとどまってきた。またこの楽章は、第二、第四楽章の二つの「夜の音楽（Nachtmusik）」とひとくくりにされて「夜」の表現であるとみなされたり、中間楽章三つまとめて「間奏曲（Intermezzo）」とみなされたりして、ながらく固有の存在意義を見出されてこなかった。しかしこのスケルツォは、グロテスクで脅かすような表現を多用し、さらには無気味という印象を聴く者にもたらず点で、前後の楽章とはまったく性格を異にしている。本発表ではジークムント・フロイトの『無気味なもの（Das Unheimliche）』（一九一九）を手掛かりに、マーラーがスケルツォで表現した世界とその表現方法を考察する。

フロイトが、形態上は明らかな対立語である“heimlich”と“unheimlich”という二語の用法の分析を通して明らかにしたところによると、無気味なものとは、本来、心的生活に古くからなじみあるものである。それは抑圧の過程を通じて我々の精神生活からは疎外されており、通常は意識にのぼらないのだが、なにかの拍子に抑圧を解かれて現実世界へ再帰すると、我々はそれを無気味だと感じるのだという。ただしフィクションにおいては、抑圧されていたものの再帰がいつでも読者に無気味な感情を喚起するとはかぎらない。無気味な感情は、読者がその再帰のリアリティを信じ込んだ場合に生じるものであるゆえ、メルヒェンのように明らかに非現実的な世界が描かれている場合には生じないとフロイトは説明している。

ところがマーラーのスケルツォは、脅かすような大げさな音楽表現を駆使し、フィクション性を前面に押し出しているにもかかわらず、無気味な感情を呼び起こす。つまりここには、はじめから「現実ではないものを見せる」としながら、なおかつ聴く者にリアリティを感じさせるような世界が用意されている。本発表では音楽分析を交え、このスケルツォがいかにして無気味という感情を生じさせるのか、その仕組みとプロセスを浮き彫りにする。

以上の考察を通して、「影のように」という指示にこめられたマーラーの意図、抑圧され、隠されている本来なじみ深いものへマーラーのまなざし、そして「無気味なもの（das Unheimliche）」というある種の否定性を通じて構築されたスケルツォの独特な世界観について検討したい。